２０１８．２．２５　大草

読書メモ

79．西田正好「花鳥風月のこころ」新潮選書（1979.7）

**＜西田正好「花鳥風月のこころ」から＞**

・国文学者の西田正好（1931～1980）が日本人の自然観と日本文化（文学、神道、仏教など）について書いたもので多くのことを示唆しており、稀に見る良著である。

・＜峰の色　渓（たに）の響も　みなながら　我が釈迦牟尼の　声と姿と＞　（山や谷などの自然は全て仏さまの声や姿なのであるとの道元の歌）。

・日本人は昔から自然を神として崇拝してきた。日本人は「仏のうしろに神がいる」という認識をしており、その神のうしろに美しい自然があった。この自然に対する畏敬の心が日本の仏教のうちに伝わり、これが「隠遁仏教」や山林仏教」に繋がっている。

・日本人のアニミズム（霊的存在信仰）の伝統や自然愛の系譜は連綿として続いている。これが日本文化史の底流となり基調をなしている。花月の美しさに熱中した西行から、越後の山野で思う存分自然を伴侶として心楽しい生涯を終えた良寛にいたるまで万葉集に芽生えた自然愛と自然礼賛の歴史は脈々としてとだえることがなかった。＜西行：ねがわくば花のしたにて春死なむそのきさらぎのもちづきのころ＞

・往年の日本人は自然の姿のなかに神々の美しさを見出してきた。

・「見る」という行為には、「たまふり（招魂、鎮魂）」という観念を伴っている。「国見」「花見」「月見」など。

・日本人の自然観を遡ると、自然神道とそのアニミズムの精神にいたりつく。

・仏教の無常思想の普及が日本人の自然観にも影響を与えた。日本人は「うつろふ」季節に無常の心（時の流れ、移り変わり、花や葉の散り失せること、ひとのこころの変化など時間経過に伴う物心両面の変化）を感じてきた。

・日本人は「飛花落葉」に滅び去るものの美しさを見出し、無常の姿そのものを見た。

・古今集以降、花といえば桜をさし、無常の心がどの花よりも散り易い桜の花に対して心情的な共感をよびさました。世の無常を思い知った平安時代貴族たちの「仏教の心」が飛花落葉の美にも魅せられる新しい自然美感の時代を招き寄せた。

・日本の代表的歌集１５０歌集を統計でみると、春の花の歌が９００５首、秋の月の歌が６６９５首、冬の雪の歌が４０４２首、夏の時鳥の歌が３３７７首。花と月が最もポピュラー。

・日本人は、神と仏の二つの異なる観点から自然を見てきた。そのなかで、神仏をうまく使い分けてきた。めでたくからっと明るいのが神道的な自然観であり「花鳥風月」「松竹梅」などに代表され、むなしく哀れさをもつのが仏教的な自然観であり「飛花落葉」「雪月花」などに代表される。こういう自然観を持っているところに日本人の特徴があると著者いう。（同じ花でも、神道の眼に映った花と仏教の眼に映った花の違い！日本人は常に、二重構造の複眼的な自然認識をしているという。）

・日本人の生活様式も、神仏習合的の伝統の影響をうけて、役割分担している面がある。

例えば、結婚式や正月の行事はおめでたいということで神道が分担し、葬式、盆の行事はあわれや空しさに通じるということで仏教が分担している。（面白い視点である）

・日本の多神教的な自然神道による自然観と、西洋の一神教の神による創造物に過ぎないとみる自然観とは異なる。自然に神格や仏性を認める日本の自然観に対し、西洋は自然を信仰対象とは見ず神による一介の被創造物にすぎない「無神の自然」とみる。明治以降の日本の西洋化でこの自然観まで西洋化されたと考えられる。若山牧水の短歌がこれを物語っている。＜幾山河 越えさり行かば 寂しさの　はてなむ国ぞ 今日も旅ゆく＞　牧水にとっての自然は既に神格や仏性を喪失した西洋と同じ「無神の自然」であり、何ら人間救済力を持たない自然であったのである。自然によって一向に癒されることのない牧水の人生は、いつまでも「寂しさのはてなむ国」を求めてさすらいの日を重ねるより仕方のない、近代人の深刻な悲哀感を代弁するものとなったという。

・外来文化を次々とまるごと受け入れることのできる日本文化の寛容性は、神道の多神教思想の融通無碍の自在な無限包容力のようなものが強力に作用していたであろう。

・日本文化の世界主義は、多神教民族であった日本人の伝統的な無限包容力によるものであると同時に、淡白な民族性、物事に固執することの少ない民族性によるものと考えられる。

・日本人の物の見方は、あれかこれかの選択を嫌い、むしろ「あれもこれも」の融和を好むところがある。おそらく神道の多神教と仏教の汎神教に慣らされた日本人固有の世界観の特徴であろう。

・機械に依存する工業化社会の致命的欠陥は、限りある地球上の自然資源の食いつぶし現象と自然破壊である。そう遠くない将来、自然資源の絶滅により電気もガスも家庭に届かなくなり、食品公害や水質汚染のために食料も水も口にすることができず、そのうえ大気汚染の進行が酸素吸入器の常時着用を必要とするような事態も実際問題として考えられる。近代の機械文明の進歩が人類史の破局に向かう「死の行進」であることを知りながらも、なお人類はその「死の行進」を逆転したり停止させることができないだろう。また自然資源の争奪をめぐって勃発するであろう世界戦争の危機もある。人類全体の即時絶滅に連なる核戦争勃発の危険性もある。

・すざまじい自然の破壊につれて、「花鳥風月」の美と心も歴史のはるか彼方へ遠ざかる。こういう日本の伝統の美と心は、いまや懐古主義者の懐古趣味によってしかよみがえらないであろう。いまや「花鳥風月」は、あきらかに失われた日本のロマンでしかない。

・人間は、近代機械文明により（自然を征服していけると）思い上がっており、自然から罰せられるであろう。

以上